

2019 年度 A O 選抜 産業社会学部
「産業社会小論文方式」
< 特色ある活動と学びを深めた皆さん対象 >

【選考講評】

1. 実施状況

(1) 志願者数、合格者数等

学科・学域・専攻	志願者数	一次合格者数	最終合格者数
現代社会専攻	50	21	18
メディア社会専攻	26	10	8
スポーツ社会専攻	26	6	5
子ども社会専攻	5	4	2
人間福祉専攻	22	11	11
学部計	129	52	44

(2) 入試目的

産業社会学部では、以下のような資質を備えた人物を求めました。

- 本入試出願以前に、積極的に何らかの活動に取り組み、それを通じて優れた問題意識を形成している者。
- 達成すべき目標を自ら具体的に定めることができ、それを達成するために積極的に持続的な努力ができる者。
- 入学後、本学部において優れた学業成績を収めるとともに、諸活動においてリーダーシップを発揮することが期待できる者。

2. 試験内容

(1) 第一次選考

第一次選考では、書類選考と小論文試験を実施しました。

書類選考では、調査書・エントリーシート・課題論文にもとづいて、高等学校等における 3 年間の学業の達成度、ならびに本学部の設定するアドミッション・ポリシーに掲げる資質について審査しました。

小論文試験では、近年の日本社会に関する 2 つの論文を出題しました。ひとつは格差問題について考察した論文で、もうひとつはパラリンピックの功罪について考察した論文です。近年、自己責任論が高まっていますが、2 つの論文はそれが社会に与える影響を考察しているという点で共通点がありました。

80 分間の試験時間の中に、この 2 つの論文に関する 3 つの設問への解答を記述するよう求めました。問 1 と問 2 は、それぞれの論文の内容を正確に読み解くことが

できているかどうかを試すものであり、単に論文の内容をまとめるだけではなく、設問で求めた条件に沿って解答することを要求する問題でした。問 1 については、表やデータを正確に読みとることや、データからいえる特徴を正確に抽出できるかなども意識しました。問 3 は、2 つの論文をもとにして総合的に捉えつつ、受験生自身の意見を論理的に論述・展開することを求めました。

(2) 第二次選考

第一次選考合格者に対して、20 分間の面接試験を行いました。

面接では、2 人の面接担当教員が受験生に対して、受験生の高等学校等での特色ある活動と学びの実績をふまえて、志望動機や問題意識、入学後の勉学についての見通しや目標などについて質問しました。

3. 出題の意図

(1) 第一次選考

書類選考では、高等学校等での正課・課外活動を通じて、大学で学びたい問題意識を明確に形成できているかどうか、その問題意識が産業社会学部の各専攻での学びに合致しているかどうか、産業社会学部でどのように学んでいくのかの見通しを示すことができているかどうか、という各点について審査しました。

小論文試験では、入学後に産業社会学部で優れた学業成績を収めるために必要な、基礎知識や読解力、論理思考の展開能力、総合的に捉えて本質を解明し、展望を見いだしていく力や人間同士の連帯を自覚しつつ、ものごとの本質を捉えることで展望を見いだす力を審査することを意図して出題しました。具体的には、文章と図表・データからの読み取り、それに基づいて受験生自身の意見を論理的に展開・表現する能力を審査しました。

(2) 第二次選考

個人面接を通じて、以下の各点を審査しました。

- 産業社会学部・各専攻への志望理由。
- 受験生の問題意識と産業社会学部で学びたいテーマの関連性。
- 産業社会学部での勉学への意欲、積極性、目標の明確さ。
- 応答が的確かどうか、リーダーシップを発揮できる見込みがあるかどうか。

4. 評価のポイント

(1) 第一次選考

書類選考では、調査書・エントリーシート・課題論文について、学業の到達度（評定平均値 3.5 以上）、アドミッション・ポリシーで示した本学部が期待する資質につ

いて審査しました。受験生自身が正課・課外活動で、どのような経験をしたのか、その経験を通じてどのような問題意識を抱いたのか、その問題意識が産業社会学部での学びにどのように結びつくのか、といった点について明確かつ具体的に書かれているものに高い評価が与えられました。

小論文試験では、3つの設問のうち、問1と問2は設問文で提示した条件に合わせて論文の内容を要約することを求めました。論文の文章や図表を正確に読み取ることができていること、設問の求める条件をきちんと踏まえて要約することができていること、指定された文字数の中で重要なポイントを漏らさず、簡潔に整理・表現できていることが評価のポイントでした。問3では、2つの論文の内容を踏まえて受験生自身の意見を展開することを求めました。自らの考えを、論理立てて説得力をもって提示することができているかどうか、それを2つの論文の内容と関連づけることができているかどうかを審査しました。この問3では、受験生の個人的な経験のみに依拠するのではなく、現在の社会状況に具体的に触れながら論じることを求めていますので、日頃から社会のあり方や変化などの一定の知識や総合的な見識から、今日の社会の課題の本質を見つけていく眼を養うことができている解答に高い評価が与えられました。

(2) 第二次選考

出願書類である調査書・エントリーシート・課題論文に基づいて、口頭での質疑を行いました。評価のポイントは以下の各点でした。

- 受験生自身の問題意識を明確に表現できているかどうか。
- その問題意識と産業社会学部の各専攻への志望理由との関連が明確であるかどうか。
- 入学後、何をどのように学びたいのか、勉学の目標を示すことができているかどうか。

5. 解答状況

(1) 第一次選考

特色ある活動や学びとして志願者がアピールした内容は、国内外でのボランティア活動や地域貢献活動、クラブ活動など多岐にわたりました。こうした活動を通じて明確な問題意識を育むことができているもの、その問題意識を産業社会学部の各専攻での学びに結びつけることができているものが高く評価されました。

小論文試験で出題した問1の要約については、多くの受験生がある程度の正答に達していました。しかしながらパラリンピックについて論じた問2の要約では、パラリンピックの功罪の一方だけを記述する解答が多くみられ、正答率に大きな差がでました。総合的な問3では、自らの考えを論理的に展開することができているか

どうか、近年の社会状況に具体的にふれることができているかどうかで評価に差が生じました。

(2) 第二次選考

これまでの学びや活動を通じての体験から、どのような問題意識を抱いたのか、その問題意識を出発点として入学後どのようなことを学びたいのか、さらにどのような目標や将来の展望を持っているのかといった点について、自らの言葉で具体的に生き生きと語る事ができる受験生が高く評価されました。

6. 次年度の受験生へのアドバイス

本入試では、高等学校等での活動や体験そのものが評価されるのではなく、そうした経験を通じてどのような問題意識を育んだのか、その問題意識をもとに産業社会学部の各専攻で学ぶ意欲と見通しの明確さが審査されます。大学での学び、さらには将来の目標や生き方にもつながる問題意識や方向性のアウトラインを一定明確にしておくことが重要ですし、そのことについて、高校生活や日常生活のなかで、他者（家族・先生・友だちなど）との関係のなかで緩やかに実践することが求められます。

そのためには、日頃からニュースに注意を払い、新聞や本を読むことで社会の動きに目を向け、それらに対する自らの意見を考えるおくことが必要になります。これは小論文試験対策としても有効であることはもちろんですが、自らの考えを明確にかつ独りよがりになるのではなく、社会状況にも関連づけて客観的に論理立てて提示する訓練にもなるので、面接試験対策にもなります。

また、自分以外の他者に対する意識を持ち、他者との議論を通して共通の目標をつくったり、喜びなどを共有したりすることへの参加も高校生活で積極的に行うことも重要です。それらを通して、集団のなかで自分を磨くことによって、事の本質を見抜いていくことだけではなく、自分の目標の価値を面接試験で自分の言葉で生き生きと語れるようにもなります。

なお、本入試では、受験生が学びたいと考える内容と産業社会学部で実際に行われている学びとの適合性についても判断がなされます。産業社会学部での学びの内容について十分下調べしたうえで、学びの内容と見通しを考えてください。

7. 進学指導上の留意点

「特色ある活動と学び」には幅広い活動が含まれ、どの分野のこういった経験がそれに該当するのかが一様に決まっているわけではありません。審査において重点を置いているのは、それぞれの活動それ自体ではなく、そうした活動を通じて受験生自身がどのような問題意識に目覚めたのか、そしてそれを具体的な社会状況や地域活動などに結びつけ、あるいは集団的な活動や対人援助活動などでその具体化に踏み出しながら、

その問題意識の目覚めから見えてきた自分の目標について、産業社会学部の各専攻での学びをくぐらせていくことで、より具体化され、自分なりの生き方や主体形成がなされていく力がどこまで高まってきているのか、といった点になります。

以上